

庭いじり



太平洋セメント社長 不死原文
ふしはら まさふみ

私が役員になった時、ある先輩からこう言われた。「これから趣味を聞かれたり書いたりすることが多くなるが、趣味で言っただけではないのは読書とゴルフだ」と。

その理由を尋ねると「読書と言うと本を贈られることが多い。それ自体はありがたいのだが、次に会った時に感想を聞かれるので必ず読まなければならぬ。これが苦痛になる。ゴルフとするとお誘いが増える。そうすると必ずプレーをご一緒する人と、日程的にお断りする人が出てくる。これが誤解を招くことになる」と言われた。

そして「庭いじり」とか「近所の散策」と書くのが無難であるとのことであった。ところが、この両方が私の本当の趣味であったので驚いた。庭いじりを始める前は、社宅のベランダで園芸を楽しんでいた。溢れんばかりの草花を育て、自画自賛のベランダ園芸であった。しかし、私の周囲の人は「趣味の良い奥様で幸せですね」と女房を褒めた。確かに、酒ばかり飲んでる姿を見て、私が園芸をやっているとは想像もできなかったのである。

私はもともと園芸が好きだったわけではなく、どちらかといえば興味が無い方であった。私が42歳の時、大阪支店から本社に転勤になり、支店の先輩がご自宅で送別の宴を開いてくれた。帰り際にその先輩から、記念に「ゴムの木」を1鉢いただいた。やや迷惑であったが捨てるわけにもいかず、東京の社宅のリビングの片隅に

置くことになった。何気なく毎日見ていると、新芽が出て少しずつ大きくなっていくのがわかり、何かうれしくなってくるようになった。

それからは、ホームセンターに行っても今までは見向きもなかった園芸コーナーをのぞくようになり、いろいろな植物に興味をそそられるようになった。

役員になり、いつまでも社宅にいるわけにもいかず、家を探すことになった。条件は、退職金の範囲で買えることと庭をつくれる広さがあることであった。

探した結果、社宅の近くの70坪の中古住宅を買った。一人で一から庭をつくった。土を入れ、木を植え、生垣をつくったり、花壇をつくったりと充実した日々であった。休みの日は午前中に近所のホームセンターや園芸店を回り、午後から庭で作業をするのが定番となった。出勤前に庭の雑草取りをするのも楽しい。

そんな楽しい日々も、社長になり、都心住まいを余儀なくされ、中断せざるを得なくなった。私は庭いじりをしながら、会社のこと・仕事のこと・家族のことなど、大概のことを考えてきた。

庭いじりは、それほど、私のなかで大切なものになっていった。庭のない高層マンション暮らしの今、何をしながら考え事をすればよいのだろうか。窓から見える東京タワーでも見ながら考えようか。